BLEACH in WHITE　－死神たちのクリスマス－

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＥＡＣＨ　ｉｎ　ＷＨＩＴＥ　－死神たちのクリスマス－

【Ｎコード】
Ｎ４３４０Ｄ

【作者名】
切香

【あらすじ】
虚圏から脱出した一護たちは、流魂街でにぎやかなクリスマスを迎えた。それから一年後、日番谷の消息が途絶えた世界で、その日を思い出す雛森。現世組、死神、破面など登場人物多め。シリアス。

プロローグ．　１２月２５日、精霊廷にて

オリジナル設定あり：
破面（アランカル）編より、１年後のお話。
日番谷が「王廷」という別の空間に旅立ち消息不明に。雛森は隊長に昇格してます。

――

がらんとして見えるほど澄んだ青空。白い筋雲が、弧を描く。
はるか遠くの山々の輪郭が黒々と浮かび上がる。
１２月に入ってからソウル・ソサエティの気温はぐっと下がり、どんどん空気が澄んできてる。
精霊廷内を早足で行きかう死神たちの息の白さが、本格的な冬の到来を思わせた。

五番隊執務室の窓から身を乗り出したあたしは、大きく深呼吸してつめたい空気を吸い込んで、背筋を伸ばした。
冬は、あたしの大好きな季節だ。
――　一年が終わる、ね。

「やぁ、雛森隊長！」
不意に投げかけられた声に振り向くと、そこにいたのは浮竹隊長だった。
白くて長い髪が、朝日にきらきらと光ってる。
あたしは慌てて頭を下げた。
「浮竹隊長・・・おはようございます！」
「いいよそんな、かしこまらなくても。君はもう隊長だろ？僕と同

格なんだから」
「はい・・・」
あたしはそう返しながらも、かすかな居心地の悪さを感じる。
隊長になって一年。まだその名前の持つ響きに、慣れきれずにいる。

「君のここ最近の活躍を、総隊長も誉めておられた。
君が隊長に昇格して、本当に良かったよ」
「いえ、五番隊隊士がみんな、頑張ってくれてるから・・・あたしの力じゃないです」
「君がそんなだから、皆団結できるんだよ」
あたしが何か言う前に、びゅうっ、と冷たい風が吹いて、あたしたちは首をすくめた。

「もう年末だね・・・何日だったかな、今日」
浮竹隊長の何気ない質問に、あたしの心はチリリと痛んだ。それを笑顔で覆い隠す。
「12月25日です」
「そうか。毎年この時期に初雪が降るもんな。今年は降るかな」
あたしたちは同時に空を見上げた。
「こんな冬の日は、思い出すね」
そういって思い出話をするときの浮竹隊長の目が、あたしは好きだ。
彼のためだけに取って置かれた、懐かしそうな、楽しそうな、でも切なそうな瞳が。
銀の髪に、翡翠の瞳。
鋼鉄みたいだった強い精神と力とは対照的に、見る度に色合いを変える繊細な色彩が、ふっと頭をかすめた。
「日番谷隊長は、元気にやってるかな」
あたしは無言で微笑を返して、浮竹隊長の後ろに広がる青空に視線を戻した。
お互い、返事を求めての会話じゃないって分かってたから。

王廷に旅立った後、この一年。日番谷くんの消息はぱったりと途絶えている。
一年前の冬、日番谷くんはよく空を見上げてた。
その白い頬が朱に染まるまで、ずっと。
その横顔を今でも鮮やかに思い出す。
まるで今も、隣にいるみたいに。

あの時すでに、心はもう王廷にあったんだろうと思う。
一度王廷に旅立てば、下位空間にあるソウル・ソサエティにはもう戻れないと分かっていても。
より前へ。より強く。そのチャンスを逃すような子じゃない。
それなのに・・・日番谷くんを迷わせたのは、あたし。
未だに藍染隊長を振り切れないあたしの弱さを、脆(もろ)さを、最後まで心配していた。
「雛森・・・」
最期にあたしを見たときのあの瞳の色、続くはずの言葉は、今も途切れたまま。

「雛森隊長！」
そのとき、廊下から声が聞こえて、あたしは振り向く。
開いた扉の向こうに、空木(そらき)第十席が立ってた。
「西流魂街５０番地区上空に、空間の乱れを発見しました。
破面レベルの虚(ホロウ)が現れる可能性があります」
「分かったわ、私が出る。三班・四班を出して」
「はっ！すぐ準備いたします」
あたしは空木第十席の、遠ざかっていく足音を聞きながら息をついた。

藍染隊長がなくなり、崩玉が姿を消して一年。

一旦壊滅したはずの破面は、崩玉が未だにどこかに存在する証のように、再びじわじわと数を増やしつつある。
結界を破ってソウル・ソサエティに現れる者もいて、死神たちと押したり押されたりの戦いが続いていた。

「大丈夫かい、昨日も出撃してただろうに」
「大丈夫です」
あたしは心配そうな視線を向けてくる浮竹隊長に笑顔を返した。
「約束しましたから、日番谷くんと。強くなるって」
廊下に向き直った時、バサッ、と音を立ててあたしの隊首羽織が翻った。
幼いとさえいえる年齢で、その体には重過ぎる重責を、背負っていたあの背中。
あれほどの覚悟も、力も、あたしにはまだない、けど。
たとえ日番谷くんと二度と会えないとしても、いや会えないなら尚更、あたしは強いフリをする。
今はただのフリでも、続ければいつか真実になると信じて。

1．　嵐前夜の休息

今より1年前の冬。
日番谷冬獅郎は、児丹坊（じだんぼう）の右肩に座って冬の風に吹かれていた。
いつも身につけている隊長羽織も死覇装すらもなく、鳶色の袴に、白の小袖姿だ。
小袖からは肘から下がのぞいていたが、その腕には包帯がびっしりと巻かれていた。
袴からのぞく足も、同じように包帯がちらちらとのぞく。

「冬獅郎、おめえ大丈夫か？誰かにやられたんだか？」
児丹坊の眼が、その腕を見やってしかめられる。
児丹坊の身長は１０メートル以上、顔の大きさが冬獅郎の全身の大きさとつりあうくらいに巨大だ。
しかし、冬獅郎を見る児丹坊の眼は、馬のようにつぶらでやさしい。
はるかに年若く体も小さい冬獅郎のほうが、刺すように鋭い目つきをしていた。

「そんなんじゃねーよ。修行だ」
冬獅郎は児丹坊の視線を避けるように、ごろりとその肩の上で横になった。
冬獅郎は、普段笑わない。自分から多くを語らない。そして他人から触れられるのを嫌う。
そして児丹坊は、冬獅郎が「十番隊隊長、日番谷冬獅郎」を脱ぎ捨てられる数少ない人間の一人だった。
「また強くなる気か」
児丹坊は呆れたように呟くと、冬獅郎に習って空を見上げた。
「仕方ねえよ。破面が今大挙してやってきてもおかしくねえんだぞ」

「そんなの本来王属特務の仕事だろうが。おめがやることねえ」
「そうもいかねえんだよ・・・」
冬獅郎はため息混じりに言った。

たしかに児丹坊のいうことは的を得ていた。
だが、破面を生み出したのは、元護廷十三隊の隊長の1人なのだ。
どのツラ下げて、王属特務に助けを求めろってんだ・・・とてもムリだ、と冬獅郎は思う。
それをやるとすれば山本総隊長の仕事だが、あのプライドの塊の総隊長が、この状況で王属特務に助けを求めるとは思えない。
「でも、王属特務なしに戦って、ソウル・ソサエティが滅びたら意味ねえだろ」
冬獅郎と児丹坊の視線がぶつかった。
「そうだな、お前が正しい」
冬獅郎はあっさり認めると、腕を頭の後ろに回そうとして、腕の痛みに顔をしかめてやめた。

「せめて、四番隊行って手足治してもらわなきゃな。歩くのも痛えなら俺が連れてってやろうか？」
「行ったんだけど、今日は入院っていうんだ。今日は家に帰るっていったら、卯ノ花隊長が後追っかけてきて」
「それで、逃げだんか」
「よくわかったな・・・つい」
「心配されてるんだろうに。まぁ、明日はちゃんと行けよ」
「判ってるよ」

真央霊術院時代、生傷が絶えなかったころは、2・3日に一度は通っていた。
明らかに他の奴よりガキで、貴族でもなく、そして能力は上だった。
どれも白と黒くらいはっきりしていることだった。

その結果、俺の傷が増えるのは、まぁしょうがない、と今なら思えるが。
一度だけ誰にやられた、と卯ノ花に聞かれて答えたところ、そいつが次の日包帯だらけでベッドに転がってるのを見た。
俺への理不尽な暴力もぱたりと止んだ。
それから、卯ノ花には逆らわないと心に決めた・・・はずなんだが。

「なぁ、児丹坊」
「なんだ？」
「王属特務ってのは、王廷っていう違う空間にいて、王を守護してるんだよな」
「あぁ、そう聞いてるが」
「違う空間ってどこだ？」
「隊長のおめえが知らねえのに、俺が知るわけねえでないか。でもまあ、やっぱり」
児丹坊はそこまで言うと、左手で空を指差した。
「上でねえか。きっと偉えやつは上にいるに違いねえ」
「・・・上ねえ」
冬獅郎は空を見上げる。冬の空は空気が澄んでいて好きだ。
白く、青く、そしてどこまでも深い。

その冬獅郎の横顔をちらりと見た児丹坊は、空に目をやって言った。
「おめえの眼の色と、同じだな」
「そうか？・・・何しにきたんだ、アイツ」
近づいてくる、よく知った霊圧を感じ取り、冬獅郎は半身を起こした。

「日番谷くん！」
果たして、児丹坊の足元まで駆け寄ってきたのは、幼馴染の雛森桃だった。

桃色の羽織の下には、紺色に花柄の着物の襟がのぞいている。
「なんだよ、雛森！」
「今日非番で戻ってくるって聞いてたのに遅いから、探しにきたのよ」
「おぉ、桃でねえか！」
児丹坊は雛森を見るなり相好を崩すと、その場に片膝をついた。
その肩から冬獅郎が滑り降り、体重がないかのようなふわりとした所作で地面に降り立った。
「もう、体は大丈夫か？あまり無理しねえほうがいいぞ」
「うん・・・もうだいじょうぶ」
雛森は手を自分の顔の前にかざして、照れたように微笑んだ。
だが、その眼の下にはくっきりとした隈のあと。
やつれたせいか、一回り小さくなったように見える。

雛森はいまから二ヶ月ほど前、信頼していた隊長、藍染に胸を貫かれ、一ヶ月の昏睡状態から目覚めたばかりだった。
もちろん体力的にも、精神的にも戦える状態ではなく、副隊長職を休んで流魂街の実家に戻っている。

「日番谷くん！その両腕と両足、どうしたの？」
冬獅郎を一瞥するなり、雛森は慌てて駆け寄った。
「なんでもねーよ、ちょっと怪我しただけだ」
腕に触れようとした桃の手を払いのけ、冬獅郎はぶっきらぼうに言う。
「もう、日番谷くん！四番隊に行って診てもらわなきゃ！」
「どいつもこいつも・・・明日行くから！」
「けど・・・」
「いーんだよ。児丹坊、じゃあ俺帰るよ」
「おぉ。帰るのはかまわねえが、また来いよ」
「あぁ」

そう、冬獅郎が返事をした直後だった。

「ん？」

冬獅郎が、少しあけて雛森が上空を見上げた。

「霊圧がいくつか近づいてくる・・・」

「冬獅郎、前から思ってたけど、よくそういうの分かるよな」

「これは・・・黒崎一護、井上織姫・・・無事助けられたのか」

冬獅郎の声に安堵が混じる。

「おぉ、あの子は無事なんか？えがった、えがった」

「精霊廷内に向かってる！でも、なんだろう、知らない霊圧が混ざってる」

「まさか・・・破面か？」

冬獅郎と雛森は顔を見合わせた。

2. 虚圏からの脱出劇～前編～

「ならぬ！」
一番隊舎で、山本総隊長は声を張り上げていた。
目の前においてあるのは、高さが2メートルはある、巨大なモニターだ。
「破面を精霊廷に連れ込むなど、言語道断じゃ。入るならお前たちだけじゃ」
「総隊長！」
モニターに映った一護が声を張り上げる。
「破面だからって、全部敵じゃねえんだよ！
それにこいつら、このまま虚圏（ウェコムンド）に放置したら、すぐに殺されちまう・・・」
しかし、その必死の叫びに返ってきたのは、巨大な壁のような沈黙だった。

「黒崎一護。ここは山本総隊長が正しい。
いつ裏切るとも知れぬ破面を、精霊廷に入れるわけにはいかぬ。
ましてその少女、元十刃だとすれば尚のこと」
一護の後ろに立った白哉の淡々とした口調に、一護は唇をかみ締める。

「いちご・・・」
その一護の肩には、ネルの小さな姿が見える。
白いボロボロのマントをまとい、髪は翠色。小さな体躯だが、その本性は元十刃。
確かに理屈はわかる。でも・・・
「じゃあ、俺も虚圏に残る！こいつらだけ残していけねえ」
「ならぬと言っておるのが判らんか！今は戦力が1人でも惜しい時

なのだ、ムダ死には赦さん」
「俺が何を選ぼうが俺の自由だろ！」
一護は一歩も引かず、それを恋次やルキアたちが心配そうに見守る。
死神は、面と向かって総隊長の命に逆らうことはできない。
一度、一護を現世に1人残して全員引き上げたことがあるが、次は虚圏に残していくことになるのか。
「それじゃあ、あたしも残る！」
キュッと眉を吊り上げ、織姫が言った。
ルキアがすぐに凛とした声でそれをさえぎる。
「馬鹿者、それでは何のために私たちがお前を助けに行ったと思うのだ！」
「破面だけは通すな！死神に結界を開け」
総隊長が大声を出し、一護が何かを怒鳴ろうとした、そのとき。

「総隊長！」
割って入った声に、総隊長は言葉を止める。
その視線の先に、ひらり、と地獄蝶が舞った。声は、その蝶から聞こえている。
「日番谷隊長か。本日は非番ではなかったかな」
「はい。恐らく破面を通す通さぬで言い争いになっているかと思いました」
「正しいな。して、何か解決でもあるというのか？」
骨ばった総隊長の指に、ふわりと地獄蝶が止まる。

「これらの破面達は、死神に有益な情報ももたらし得ます。
破面についての情報なら、今は喉から手がでるほど欲しいのも事実。
精霊廷内で問題なら、流魂街に滞在させてはと考えますが」
ふむ、と総隊長は唸った。
「しかし、破面が暴れた場合はどうする。警備に裂ける人員などい

まい」
「西流魂街の毛利家に連れて行きます。
そこなら毛利梅を初め、精霊廷レベルの人間は何人もいます」
「そうか、お主にとって毛利家は実家であったな。今は雛森桃もおるか」
「はい、います！」
地獄蝶から雛森桃の声も漏れる。

総隊長は一瞬上に眼をやって視線を泳がせたが、さすが決断は早かった。
「よかろう。お主に一任する、日番谷隊長」
「ありがとうございます。雛森！」
同時に、２人は「力ある言葉」を唱える。

「う・・・うぉっ？何か足場が・・・」
一護がその場でよろける。
断界の中は、どこからか薄赤い光が差す以外は暗く、進んでいるのか戻っているのかも分からない。
「別の場所に出口をこじ開けようとするのだ、空間が不安定になるぞ、気をつけろ！」
「気をつけろって言っても、できることねーだろ！違う空間に落とされたら仕舞いだ」
恋次が額から汗をたらしながら怒鳴った。石田がそれを耳ざとく聞きつける。
「え？それはどういうことだ！」
「途中で結界をこじ開けるのは生半な作業じゃねえんだよ。失敗して変な時空にでも落ちたら、一瞬で粉々になるぞ」
「え？ちょっと・・・」

「ガタガタ抜かすなよ」

会話に面倒くさそうに割って入ったのは、更木だった。
その肩に、笑顔のやちるがしがみついている。
白哉も平素となんら変わらない表情だ。

次の瞬間、冬獅郎と雛森の声が、張り詰めた空間に凛と通った。
「縛道の八十五、孤月(こげつ)！」
途端、突然、ぽっかりと開いたトンネルのように、断界の向こうに丸い円が開けた。
円の中は真っ青な青空・・・だと思った瞬間、突風が吹いた。

「な、なんだこりゃ！」
まるで掃除機に吸われてるかのような引力だ。
「ネル！」
一番軽量のネルが、一護の肩にしがみつくまもなく、ひゅん、と飛ばされていく。
一護が手を伸ばしたが、間に合わない。

3．　虚圏からの脱出劇～後編～

冬獅郎と雛森は互いに刀を構え、結界が空くのを見守った。
虚圏とソウル・ソサエティをつなげる荒業だ。うまく扱わねば、敵まで呼び寄せかねない。
空にぽっかりと暗い穴が空いた、と思った瞬間、小さな影がこっちに向かって飛んでくる。
「日番谷くん！」
「ああ」
冬獅郎は刀を構えて待った。
岩だか破面だか知らないが、一撃で斬って捨てるつもりだった。

「おぉい！そいつ拾ってくれ！」
一護の声が響く。
「ん？」
冬獅郎の眉間の皺が深くなる。
「助けてくれっス～～！」
悲鳴をあげて飛ばされてきたのはネルだった。
頭に張り付いた虚の仮面を、冬獅郎は見逃さない。
「きゃー、人殺し！」
ネルが叫ぶ。ネルに向けられた氷輪丸がギラリと光った。
しかし冬獅郎は、ギリギリでその刀の刃と峰を逆にする。
そして峰でネルの胴を軽く打って方向を変えさせた。
「うっ！」
ネルが声をあげて、冬獅郎の胴にぶちあたって、止まった。

次の瞬間。
「うぉっ！」
「きゃー！」

十人十色の悲鳴を上げて、次々と結界の穴から全員が落下する。
さすがに死神勢は華麗に地面に着地したが、人間と破面は次々と地面になだれ落ちた。

「なんか来るっス！」
冬獅郎の肩にしがみついたネルが上を指差した。
「おぉ、ありゃすげえな」
児丹坊が口をあけて呟く。
虚圏で見た、砂のバケモノだった。虚圏から体を伸ばし、こちらにあの無表情の顔がのぞいている。
「おぃ、一護！あいつも友達か？」
「んな訳ねえだろ！」
地面に顔面から落ちた一護が、涙目で児丹坊に怒鳴り返した。
「よっしゃ、任せとけ！」
児丹坊が懐から斧を取り出し、大きく振りかぶって投げつける。
結界の向こうの顔に見事にあたり、その顔が崩れた。

「結界を閉じるぞ！」
「うんっ！」
冬獅郎と雛森が同時に何かを唱える。
それに呼応するように、互いの抜き身の斬魂刀が光を放つ。
それと同時に、暗いの穴に見えていた結界が収縮し、空にあいた小さな点のように見え、やがて消えた。
チュンチュン、となく雀の声に、一護は我に返った。
「・・・見事」
一護の隣に立った白哉が、結界がなくなった空を見上げ、呟いた。

しかし、その声は、雛森の悲鳴でかき消される。
「なんだっ、雛森！」
ネルの襟首をつかんで下に飛び降りようとしていた冬獅郎が、雛森

を見やる。
雛森はドンドチャッカとペッシェを見たまま固まっている。
「えーっと、そこのあんた、こいつらは・・・」
それを見た一護がフォローしようとしたが、雛森はおびえた表情で首を振った。
「ごめんなさい、あたし虫が苦手で・・・」
「虫！」
ペッシェが大声を出し、ヒッ、と雛森は声をあげてまた固まった。
「見事なボケ・・・いや、突っ込みか？というか、我々は虫ではない！」
「黒崎！まさか助けたって、これか？」
「・・・おぅ」
一護が心なしか気まずそうに冬獅郎に返した。冬獅郎はため息をつく。
「お前、そのうちカブト虫助けるためにでも危険に飛び込んでいきそうだな。付き合いきれねえ」
「だからこいつら、虫じゃねーって。・・・ちょっと判るけど」

ふう。
白哉がため息をついた。そして、門のほうへ歩み寄る。
「鮮やかな手並だ。しかし、この私をこんなところに落とすとは、心外だな」
けっ、と更木が地面に唾を吐いた。
「貴族様には流魂街の空気はそぐわねえってか？女は流魂街出身の癖によ」
ちらり、と白哉が更木を見やる。その視線が危険な光を浴びた。
ふたりの間に、ひょい、と冬獅郎が飛び降りた。小脇に抱えたネルを地面に下ろす。
「あぁ、悪かった」

なんだよ、とでも言いたそうな顔で、更木が冬獅郎の白い頭を見下ろした。
「気が抜けた炭酸みてえな物言いだな」
「うるせ・・・」
冬獅郎の言葉は、自分のくしゃみでかき消された。
「なんだてめえ、風邪か？おまけに凍傷かよ。しまらねえ」
「うるせえってんだ。・・・児丹坊！」
「俺の斧・・・」
「斧だったら俺が買ってやる！門をあけてくれ」
児丹坊が立ち上がり、その肩から雛森が飛び降りた。
冬獅郎と雛森を除いた死神たちは、開いた精霊門に向かって歩み寄った。

「・・・日番谷隊長」
「何スか」
白哉の声に振り返った冬獅郎は、自分に向かってふわり、と流れてきた白い布を反射的につかんだ。
それが白哉がさっきまで身につけていた襟巻だ、と気づくにはしばらくかかった。
「・・・修行もほどほどにせねば、いざという時に戦えぬぞ」
「はぁ。これは・・・」
「今宵の礼だ」
はっと冬獅郎は顔をあげたが、白哉は振り向かず、そのまま精霊廷内へと消えた。

「恋次に聞いたことがあるぜ、これ一枚で家が何軒も建つらしいぞ！」
一護の声に、現世組が集まる。
「へー、こんなのがねえ。何でできてるんだろ」
「でも確かにあったかいぜ。それより行くぞ。突っ立っててもしょ

うがねえ」
冬獅郎はぐるぐる首に巻くと、そのまま歩き出した。

「おい、冬獅郎！斧は・・・」
「クリスマスプレゼントに買ってやるって！」
涙目の児丹坊にそういい残して、冬獅郎は先に立ち、流魂街の街並みに足を踏み出した。

4.　流魂街のクリスマス

「クリスマスプレゼント、っつったか、さっき」
歩きながら、一護が冬獅郎を見下ろした。
「言った」
「ソウル・ソサエティにもクリスマスってあるのか？」
「あ？」
「精霊廷にはないけど、流魂街にはあるよ。１２月２５日だから、今日ね」
にこっ、と笑って一護に話しかけたのは雛森だった。
「自己紹介がまだだったわね。私は雛森桃。五番隊の副隊長です」
「あ、あぁ、ドモ・・・俺は黒崎一護」
一護は妙にどもりながら挨拶を返した。

よく考えたら、まともに精霊廷の死神と自己紹介なんかしたのは初めてだ、と思う。
初対面のときは敵だったからな。あのころは、手を組んで戦うなんて夢にも思ってなかった。
クリスマスの話題なんかするなんて、初めのころを考えると嘘みてえだ。

「あぁ、そうか。流魂街の住人は、みんな現世で住んだことある人間だったね。
クリスマスくらいあるか」
石田が１人で納得した。
「ということは！」
織姫が身を乗り出す。
「もしかして、現世と同じようにクリスマスパーティーもするんですか、桃さん？」

「ええ。ケーキもあるよ。だから、日番谷くんも毎年クリスマスには帰ってくるの」
「おい。その言い方だと、俺がケーキほしさに戻ってきてるみたいじゃねえか！」
横から冬獅郎が噛み付いた。桃はにこっと笑って答えない。

「今からちょうど、買出ししてから家に帰ろうと思ってたから、みんな好きなの買っていいわよ。
お金はちゃんと日番谷隊長が払ってくれるから」
「こんな時ばっかり隊長呼ばわりするんじゃねえ」
軽口を叩きながら、冬獅郎と雛森が先へ行く。
通りの角を曲がったところで、皆は歓声を上げた。

西流魂街のメインストリートになるのだろうか。
１０メートルはある大通り沿いに、いきかう人、人、人。
これだけの人数を流魂街で見たのは初めてだ、と一護は思った。
そして店には、肉から魚から野菜から果物まで、溢れんばかりに並んでいる。

「流魂街って、霊力を持たない普通の奴は、食わないでいいんじゃなかったのか？」
一護に聞かれて、冬獅郎が顔をあげる。
「この辺り一帯・・・潤林安（じゅんりんあん）は、霊圧が高い奴らが固まって住んでるところなんだよ。
全然暮らし方が違うから、住む場所も他の奴らとは違う」
無愛想なようだが、質問には律儀に返してくる。
根っから真面目なやつなのかもしれない、と一護はちらりと思った。

流魂街・・・現世で死んだ者が転生を迎えるまでに住む世界には、稀に霊圧がある者が存在する。

普通の住人が腹も減らず年も取らず、百年の単位で現世に転生していくのに比べ、
霊圧のある特殊な者達は、飲み食いもすれば緩やかに年も取る。
そして転生もしないと聞いている。
あまりに違いすぎる、ふたつの人種が一緒に暮らすのは、確かに難しいかもしれない。

「わー、いろんな食べ物がある！」
「これ、何でも食べていいんスか？」
「オイ、金もってけ、金！」
走り去ろうとした織姫の頭に、冬獅郎が金が入った袋を放った。
「いったーい！」
頭を押さえながらも、織姫は上機嫌で手を振り、人ごみに消えた。

一護はネルを肩車すると、織姫の後について歩いた。
――なんか家族みてーだな。
そこまで思って、頭からその思考を振り払う。
「ねー、黒崎くん、見て見て！お祭りみたい！」
そんな一護の思惑など露知らず、織姫は子供のような笑顔で、カルメ焼き機を見守っている。
モチを店頭で焼いて売ってる駄菓子屋。安っぽい面。どこからか聞こえてくる太鼓の音。音楽。
わぁぁっ、と歓声が上がった方を見れば、そこは射撃屋だった。
なんか、クリスマスって言うよりかは、確かに縁日の冬版って雰囲気だ、と思う。

どうなるかと心配してたペッシェとドンドチャッカも、この場所では仮装してるやつみたいに見えるらしく、子供たちが群がって大人気だ。

「ねえ、今日雪降るかな！」
ケーキを買っている時、人ごみのどこかから子供の声が聞こえた。
「そうねえ。お空の神様が降らせてくださるわ。いい子にしてれば、ね？」
「うん！じゃあ、いい子にしてる！」
たわいもない、母親と子供らしい会話。
ふふっ、と織姫が一護を見て微笑んだ。
「かわいいね、やっぱり流魂街でも、ホワイトクリスマスがあるんだね」

クリスマスプレゼントなんてきっと買う余裕がない家が多いだろう、流魂街。
ここの住人が貧しいのは、穴の開いた上着や、一間くらいしかなさそうな家を見ればすぐ分かる。
その中では、クリスマスの雪って言うのは、きっとサンタクロースが持ってくるプレゼントみたいに、嬉しいもんなんだろう。

「いちごー、ユキって何スか？」
きょとん、としてネルが聞いた。何のことやらサッパリという顔をしている。
「そっかネルちゃん、砂ばっかりの虚圏にいたんだものね。雪なんて降らないわよね・・・」
「雪ってのは・・・そーだな、細かい氷の集まりだ」
「氷が降ってくるんスか？当たったら痛そうっス」
逆におびえたような顔をするネルに、一護と織姫は思わず笑い出す。
「そんなのじゃなのよ。柔らかくて、ふわふわしてるの」
「柔らかい氷ッスか？？」
どうやら逆効果だったようだ。一護は空を見上げた。
綺麗な夕焼け空に、刷毛で塗ったかのような白くて薄い雲が見える。
初めて雪をみたのはいつだったっけな、と一護は考えても無駄なこ

とを考える。
どう思ったんだろう。

「今日は降らねえなー。でも流魂街もこんなに寒けりゃ、近いうちに降るぜ、きっと」
「オイ！もう引き上げるぞ」
冬獅郎の声が聞こえたほうを見上げると、夕焼け空に地獄蝶が一匹。
「仕事でもねえのにいーのかよ、使っても」
「いーんだよ。そこの井上、ほっとくと大量に変なもん買うから気をつけろ！」
「変なもんって何だよ・・・やめろ井上！」
一護は、サルの手に似た、怪しげな干物に見入っている織姫を引き離した。

そして、冬獅郎の霊圧をたどって、人ごみを抜け出す。
少し歩いたところですぐ、冬獅郎と雛森、チャドと石田、ペッシェとドンドチャッカに出会った。
特にペッシェとドンドチャッカは、物干し竿のようなものを両側から背負って、袋に入った食料だか何だかを運ばされている。
一体何人でどれだけ食う気だ、と一護は呆れた。

一護と織姫を見るなり、冬獅郎は踵を返した。ざっ、と足音が聞こえる。
「冬獅郎くん、あの手足痛そうだね・・・帰ったらすぐ見てあげなきゃ」
ぽつん、と井上が呟く。
それを聞いて一護は初めて、冬獅郎の手足に巻かれた包帯に気がついた。
確かに、歩き方がいつもみたいに軽やかじゃない。
いつもなら足音さえさせずに歩くはずだった。

それでも泣き言ひとつ言わずに隠してるのは、単なる意地か。
白哉は修行のしすぎ、といっていた。
現世で別れてから一ヶ月。戦っていたのは一護たちだけじゃなかったと思い知る。

5. 傷跡

そして、一護たちが辿り着いたのは、祭りのある通りから２０分ほど歩いた家の前だった。
「すげえ」
一護は思わず声をもらす。
石田やチャドも、きょろきょろとあたりを見回している。
それは、
「昭和の家」を教科書に載せたような、それはもう典型的な日本家屋だったからだ。
家の周りは土塀に囲われ、庭では鶏が地面をついばんでいる。
瓦屋根のその家は、一護の家と同じくらいの大きさに見えた。南側には縁側がしつらえてあり、そこで何人かの子供が、独楽を回して遊んでいた。

「ただいまー」
雛森が明るい声を張り上げる。
「だ」のあたりで、子供たちの顔がいっせいにこちらを向いた。
「わー、シロにーちゃん、桃ねーちゃん！」
その表情に、混じりけのない笑顔が浮かぶ。
独楽を放り出して、子供たちが２人に駆け寄った。

「ん。ちゃんと手を洗って食えよ！」
冬獅郎が箱をぽん、と無造作に玄関先に放り出した。
中をあけた子供たちが、シュークリームを見て目を輝かせる。
「わーい、ありがとう！」
シュークリームをみてそこまで喜ぶ子供は初めて見た・・・と、現世組が妙な感動を味わっている時、引き戸が音を立て、ゆっくりと開かれた。

そこに立っていたのは、雛森より少し背が低い、痩せた老女だった。巾着のようにきゅっとすぼめられた口元が、雛森と冬獅郎を見るなりほころんだ。
「梅おばあちゃん、日番谷くん見つけてきたよ！」
雛森が、顔いっぱいの笑みを返す。

梅と呼ばれた老女の着物につかまってこちらをのぞいたのは、まだ2～3歳くらいに見える幼女だった。
冬獅郎の顔を見るなり、たたた、と軽い足音を立てて一生懸命に走り寄る。
冬獅郎の着物をぎゅっとつかみ、その腹の辺りに無言で顔を埋めた。
「澪（みお）ちゃん、ずーっと寂しいの我慢して待ってたもんね。えらいね」
そのまま動かない少女の頭を見下ろして、雛森が言った。
冬獅郎は無言で、その頭に手のひらを置いた。
「・・・ただいま」
一護は、これほど冬獅郎が柔らかい表情をするのを初めて見た、と半ば驚きながらそれを見ていた。
おにいちゃんと妹、みたいなもんか。
護りたい、小さな存在を前にすれば、誰だってこんな表情になるのかもしれない。
その風景は、現世に残してきた双子の妹を思い出させた。
あいつら、元気でやってるだろうか。
栗色の髪で無邪気に笑う笑顔と、自分に良く似た勝気な瞳を思い出し、一護はほろ苦く微笑んだ。
「桃も、冬獅郎も、待ちかねたよ。お客さんも、早くあがりなさい」
梅は、そういって一護たちにも笑顔を向けた。

ネルは、口を半開きにしてコタツに見入っていた。
「なんスか、これ」

「あー、何も考えんな。俺と同じようにしてろ」
一護は説明を放棄し、コタツに足を入れた。
隣でびくびくしながらコタツに指先を突っ込んだネルが、すぐにぱーっと笑みを浮かべた。
「あったかいッス！」
「そーだろ、そーだろ」

「ほんと、おばあちゃんの家みたいだね・・・」
きょろきょろと織姫があたりを見回した。
一護も織姫も元々東京暮らしで、田舎に行った経験がない。
だからここまで典型的な和風の家は初めてだったのだ。
「そういえば、現世のお前らの家って、こんなんじゃなかったな」
一護と織姫の向かいに座った冬獅郎が言ったとき、ふすまが開いた。

「粗茶、ですが」
盆を持って現れた見慣れた人物を、冬獅郎も一護も織姫も、ぽかんとして眺めた。
「松本・・・俺ん家で何やってんだ？」
「クリスマスパーティーに招待してもらったんですよ！
精霊廷にはクリスマスってないからつまんなくて」
乱菊は自らの隊長に向かって満面の笑みを浮かべる。

「んなことはどうだっていい！それよりお前、あの山ほどの仕事は・・・」
「オリヒメー！！心配してたのよ！」
乱菊はおそらく故意に冬獅郎の言葉を遮ると、織姫にがばっ！と飛びついた。
「よく戦ったわ」
ぽん、と頭を撫でられ、織姫の目に一気に涙がたまる。
裏切り者の烙印を張られることを覚悟で、織姫は虚圏に1人旅立っ

た。
何も聞かず、信じて待っていてくれた仲間の顔を、織姫は焼き付けるように1人ずつ見た。
それを見た冬獅郎は、口をへの字にして文句を飲み込んだ。
気づけば、襖の奥から、数人の興味津々の視線が投げかけられている。
「皆霊力が強いね、ここの子は。特に」
ちらり、と石田が冬獅郎に目を向けた。
正確には、その隣にちょこんと座った澪という少女に。
「澪ちゃん、だったかな。未来の死神候補かな、君は」
「ええっ？」
声をあげたのは一護と織姫だった。
澪は、冬獅郎の横にいられるだけで嬉しいらしく、にこにこと笑みを浮かべたまま何も話さない。
「やめろ。余計なこと言うんじゃねえ」
それを遮ったのは冬獅郎だった。
その言葉の怒りをはらんだ響きに、澪が少し目を見開いて冬獅郎の横顔を見上げる。
その大きな目に見つめられ、冬獅郎が気まずそうに顔を逸らした。
その冬獅郎の顔を、乱菊が眉をひそめて見つめる視線に、一護は気づいた。

「お兄ちゃん心配なのよね、死神って危ない仕事だから」
雛森がとりなし顔でそういうと、茶飲みをそれぞれの前に置いてゆく。
「別に澪だけじゃねえよ。特に潤林安には、高い霊圧のやつも結構いるんだ」
冬獅郎は顔の前で軽く手を振って続けた。この話は仕舞いだ、とその表情が言っている。

「そうか、流魂街にも霊圧が高い人間がいるんだね。藍染が攻めてきたとき頼もしい」
石田がそういった。そのとき。雛森が湯飲みの茶をこぼした。
「あつっ！」
「雛森！なにやってんだ。もういいから着替えてこいよ」
「う、うん」
雛森が手を気にしながら部屋の外にでた。
ピシリ、と戸が閉まったとき、冬獅郎がかすかにため息をつく。

「それより冬獅郎くん！怪我、見せて。あたし治すから」
織姫が膝立ちで冬獅郎の元に歩み寄り、有無をいわせずその右手を取った。途端、
「いてっ！」
「わっ、ごめん！」
冬獅郎と織姫がびくっ、と体を離す。

「・・・手、見せて？」
腫れ物に触るように、織姫がゆっくりと冬獅郎の右腕にまかれた包帯を解く。
「うわっ・・・」
一護の口から、声が漏れた。
腕全体が、黒く変色するほどの凍傷に覆われていた。
両腕が一番酷く、足はまだマシだが、それでも重度なことに間違いない。
澪は息を飲み、その傷に見入っている。
「この、凍傷・・・ほうっておくと、手足を切り落とさなきゃならなくなるよ」
石田の指摘は、医者の息子だけに説得力があった。
「なっ、治す！治します！」
石田の声に、織姫が慌てて髪飾りに手をやった。

「・・・ありがとう」
柔らかな光に覆われ、冬獅郎がぽつりと言った。
「それにしても冬獅郎、これ、まさか氷輪丸で修行したからか？やりすぎだろ、おめー」
「それでも。藍染との決戦までに完全な卍解を手に入れねーと、俺の凍傷どころじゃすまねーんだぞ」
冬獅郎はそういうと、後ろの壁に立てかけてあった氷輪丸に目をやった。
「そうはいっても、オメーよ・・・」
「黒崎。他のやつらもだが」
冬獅郎が周りを見回して、急に改まった声を出した。
「雛森の前で、藍染の名前は出すな」
「・・・え？」
「雛森は、藍染のいた五番隊の副隊長だ。
あの反乱で藍染に瀕死の重傷を負わされてもまだ、藍染は誰かに操られてるんだと庇ってる。だから」
冬獅郎は、そこまで言うと言葉をとぎらせた。
言葉を捜しているらしい様子に、いたたまれなくなって一護は言葉を挟んだ。
「・・・判った」
一護には、それくらいのことしか言ってやれなかった。

直接藍染に裏切られた雛森は問答無用に哀れだ。
しかし、それを見守るものもまた、辛いのだ。
一護は、冬獅郎の腕の凍傷が少しずつ癒えていくのをみながら、そう思った。

6. 死神の理由

短い冬の夕焼けが、終わろうとしていた。
毛利家は、いまやあちこちの家からやってきた、大勢の人々でにぎわっている。
ふたりの隊長格を出したこの家は、潤林安の名物みたいなものなのかもしれない。

なんか現世みたいだな、と一護は目の前の風景を見ながら思う。
思い思いに食べ物をつまみ、酒を飲んで、子供は庭ではしゃぎまわる。
いや、こんな風景、やっぱり現世にはねーか。
一護は畳に寝転がった。これでテレビとゲーム機があれば、まるきり現世だが、
それがない精霊廷は決して不幸せそうには見えなかった。

「にーちゃん？」
「十番隊長さん？」
「そこの小さい人！」
子供たちに好き勝手呼ばれても、冬獅郎はこたつに肩まで突っ込んで眠りこんでいた。
他の隊長がずいぶん虚圏に行ってる時間、きっと他の隊の仕事も引き受けつつ、腕が壊れるまで修行をしていたのだろう。

「オイ、ガキ。冬獅郎に無理させんな」
一護はこたつの向こう側から、子供たちに声をかけた。
だいたい、子供の中に混じれば尚更良くわかるが、冬獅郎だって十分子供なのだ。
一護は、小学五年生の自分の妹たちよりもさらに背が低い、冬獅郎

の背中を見つめた。
隣には澪の頭も見えるが、同じく眠っているのだろう、規則正しく肩が上下している。

ふわ、と。冬獅郎の頭に、しわくちゃの手が置かれた。
「ばーさん・・・」
信じられないことだが、と一護は思う。
この人のことを、冬獅郎は何度も、ばーちゃんばーちゃんと無防備に呼ぶ。
頭を撫でられても、冬獅郎と呼び捨てられても、まったく意に介さない。
宗旨替えか？って一瞬思ったが、こっちが地なのかもしれない。

「本当は寝かしといてあげたいんだけどね・・・」
そういって、ぽんぽん、と軽く冬獅郎の頭を叩いた。
「ん・・・？」
冬獅郎が薄く目を開ける。寝そべったままふわぁ、と大きなアクビをした・・・瞬間。
カシャリ、とやたら機械的な音がした。
一護と冬獅郎が振り向いた先にいたのは、カメラを構えた乱菊の姿。
「お宝ゲット！」
「松本！てめぇいつの間に・・・」
冬獅郎ががばっ、と跳ね起き、その勢いなのかなんなのか、こたつを一気に乗り越えて乱菊に飛びついた。
「うわぁ？隊長積極的・・・」
「黙れ！てめぇまた盗撮か！」
「だからただのナイショ撮りですって！
写真集第二弾のためにがんばってる副隊長に、ちょっとくらい協力してくれたっていいじゃないですか」
こんなにがんばってるのに、と頬を膨らませる乱菊の表情に、罪悪

感などはカケラもない。

その頬は、乱菊には珍しく真っ赤になっている。
その後ろには一升瓶がいくつも転がってはいるが。
「・・・写真集第二弾？」
カメラを奪い合う十番隊隊長と副隊長。
ドッタンバッタンとやりあうその隣で、梅がつぶやく。
「いやっ、気にすんな！」
さすがに育て親に自分の写真集の存在を知られるのは気まずいのだろう、乱菊の顔を押しのけて冬獅郎が言った。
横で雛森が無邪気に言う。
「楽しみだねっ、前のも色々あってあたしたちでも楽しめたけど」
「・・・おい！雛森、まさか買ったのか？」
「何言ってるんですか。隊長の実家でしょ？当然真っ先に確保して、配るに決まって・・・」
乱菊がさも当然、という感じで口を挟む。
「ばあちゃん、雛森」
「・・・はい」
「見たのか、その・・・アレを」
「見たよ。特にあの寝顔の写真が・・・」

そこまで聞いた冬獅郎が、へなへなと脱力しこたつの机の上に上半身を突っ伏した。
「松本・・・」
「た、隊長！凍ってます！あたし凍ってますって！」
「あぁ、そのまま凍れ。十万年後に、氷漬けになって発見されろ」
「冬獅郎、おやめ！」
あわてた梅が間に割ってはいる。
冬獅郎が突っ伏していた顔を上げ、ちらりと半分氷づけになってい

る乱菊を見やった。
「こいつだって、自分が発掘した才能で氷漬けにされるなら本望だろ」
「すいませんねえ、あたしが無理やり隊長を、死神稼業に誘ったのは事実ですもんね」
乱菊が蓮っ葉に言い捨てるのを聞き、その場の皆が「ん？」と顔を見合わせた。
ちらり・・・と聞いたことがある、と一護は思った。
確かそれを喋ってたのは恋次だったか。
類稀なる霊圧を秘めながら、流魂街に埋もれていた冬獅郎を見つけ、死神になるのを薦めたのは乱菊だと。
それがそう遠くない未来に上司部下の関係になるなんて、縁は奇なりと恋次は言っていたが。

一護が見守るなか、一瞬冬獅郎はぽかんと目を見開いた。
そして、やおら立ち上がると、乱菊の腕の辺りを蹴っ飛ばす。
「な！何すんですか、隊長！」
泡を食った表情で叫んだ乱菊の腕から氷が落ち、氷から解放される。

ちらり、と澪の寝顔を見下ろし、冬獅郎は乱菊に向き直った。
「澪と俺は違う。大体俺は、自分の意思で死神になったんだ」
「・・・なんでですか」
明らかに酔っ払った乱菊の表情が、かすかにホッと緩んだのに気づく。
悪酔いの原因は、これか。

冬獅郎は、乱菊をまっすぐ見たまま続けた。
「『これが俺の限界か？』っていつも問うてた。
死神になったから、前へいける。強くもなれる。
・・・だから、きっかけをくれたお前には感謝してる」

流魂街でくすぶってた時代の冬獅郎が、自分の能力に気づかなかったはずはない。
それでも敢えて能力を押し殺し、流魂街で暮らしていた理由は、一護には分かりようがないが。
いや・・・分かるか。
一護は、梅と澪を見比べて、そう思った。
「より前へ、より強く・・・か」
乱菊は、少しだけ泣きそうに表情をゆがめたが、すぐに笑顔に変わった。

7.　ラスト・クリスマス

「それじゃ、今日は飲みますか！」
「もう酒はねえよ！」

そのやり取りを微笑みながら見守っていた雛森が、冬獅郎の腕をゆする。
「日番谷くん、そろそろだよ」
面倒そうに振り返った冬獅郎を、わくわくした表情で見つめる子供の目・目・目。
「にいちゃん！やってくれるよね！」
冬獅郎はそれを聞き、ふう、とため息をついた。
そして膝に手をおいて立ち上がり、廊下へ向かって歩いた。
障子をあけた向こうは、綺麗な夕焼け空が少しずつ、闇に沈む頃。

冬獅郎が、氷輪丸を手に取った。
「おい？どうすんだよ？刀なんかとって」
一護が一瞬目の色を変えるが、子供たちがわぁっと歓声をあげたのを見て、眉間に皺をよせる。
冬獅郎は縁側に出ると、縁側の柱に背中を寄りかからせ、氷輪丸を抜き放った。
寒いにもかかわらず、子供たちは全員縁側に飛び出す。
雛森と梅は、障子の傍に座って、その刀身に柔らかい朱色の光がともるのを見つめていた。

「何っスか？」
眠るペッシェの腕の中にいたネルが、こたつからもぞもぞ這い出してきて、冬獅郎の膝に乗り上げた。
冬獅郎はスウ、と息を吸い込んだ。

「霜天に座せ・・・」
言いかけたそばから咳き込む。
「もー、隊長。風邪引いてるんでしょ？無理じゃないですか？」
「おい？冬獅郎？おめーまさか今、始解しようとしたのか？」
やれやれ、という表情で背後から覗き込む乱菊と、焦る一護。

そのとき。小さな手のひらが、刀の柄を握る冬獅郎の手の上に重ねられた。
「・・・ひょうりんまる」
小さな桜色の唇が、たどたどしくその名を呟く。
冬獅郎が驚いたように振り返り、隣に立つ澪の横顔を見た。
その小さな体から、冬獅郎とよく似た霊圧が放たれるのが分かり、他の者たちも息を飲んだ。

言葉が途切れた静寂の中、カキン、と氷が鳴った。
庭を見やると、中空に浮かんだ氷のカケラが一気に氷を生み、大きな塊になるのが見えた。
それは見る見るうちに、巨大な龍の頭の形になり、首を、背中を形作っていく。
いつもだったら一瞬でこれだけの体積の龍が生まれるのだが、冬獅郎が弱っているからか、澪の力が加わっているからなのか、いつもより格段に遅い。
幾層もの氷が深い青に光り、完全体の龍の姿は幻想的なくらい美しかった。

「小僧。我に何の用だ」
一護はそれを聞いたとき、どこかに別の人が潜んでいるんだと思った。
「俺は小僧じゃねえって、何度言えば分かんだ。毎年やってんだろ」
冬獅郎が言い返して始めて、一護はその正体に気づく。

――龍・・・これが氷輪丸か？
そういえば、恋次の斬魂刀の正体は鵺だった。
他の斬魂刀の本体を見たことはないが、斬月みたいに人型のケースのほうが、実は珍しいのかもしれない。

「氷輪丸」は、戦いにはおよそ縁遠い風景を見下ろした。
「またか。破面が攻めてくるとも知れぬ緊急事態に、こんなことをしている場合か」
氷輪丸のその言葉に、それぞれ顔を伏せた。
「だからこそやるんだよ」
冬獅郎の返事は短かった。

氷輪丸はそれ以上何も言わず、重さがないかのように、ふわりと宙に舞い上がった。
その姿が目でやっと見えるくらいの大きさになったとき・・・ふっ、とその姿が溶ける様に消えた。その途端。
ふぅわり、と白いものが暗い空を舞った。
「・・・」
ネルが立ち上がった。その眼が、上空の一点にクギ付けになっている。
「うわ、うわああ」
危なっかしくあっちに行ったりこっちに行ったりした挙句、その手のひらにそれを捕まえた。
そしてその手を開いて・・・
「消えちゃったっス」
そういって、空を振り仰いで・・・無数に舞う雪に、ネルは文字通り腰を抜かした。
「雪だ！」
子供たちもいっせいに叫んで外にかけだした。
家の外でも、ざわざわと人の気配が広がる。

「雪だ！」
「きれいだねえ・・・洗われるね」
ソウル・ソサエティの人がみんな、空を見上げてるだろう一瞬。
「これも、氷輪丸の力なのか」
雪に手を伸ばそうとする織姫の体の向こうで、一護が冬獅郎に声をかけた。
「そうだ。氷輪丸は天候を操れるからな」
「日番谷くん、ある年始めてから毎年、クリスマスには氷輪丸で雪を降らせるのよ。
ソウル・ソサエティ全体にね」
なんで、といおうとした一護の声を、周りの声がさえぎった。
子供や若者は外に出て。大人や年寄り、病気のものは家の中で。
舞い降りる美しい雪を見て、歓声をあげる。潤林安中の声が聞こえる。

朽木邸の近くの竹林では、朽木白哉がゆきすぎる雪に足をとめた。
空を見上げると、雲の隙間に青白く輝く氷輪と、月光に輝く雪が舞い降りるのが視界にうつる。
白哉は足を止め、月光と雪をその身に浴びるかのように、目を細めた。
その隣には、竹林の中であくまで紅く咲き誇る、一輪の椿。
「兄様！」
背後から聞こえたルキアの声に、振り返る。
その表情は、いつになく柔らかい。

「なんだ、清音！てめー、こそこそ浮竹隊長のとこに行こうとすんじゃねえ！」

「なによ、そっちこそ抜け駆けすんじゃないわよ！」
十三番隊では、争う第三席がふたり。
「こらこら、2人とも。この寒空の下、何をケンカしてるんだ」
奥から現れたのは、寝巻き姿の浮竹だった。
「あぁっ浮竹隊長！すいません、今このやかましい髭男をたたき出して・・・」
「うるせえのはお前だ！」
ふう、と浮竹がため息をついたとき、ちらちらと舞う白い雪に視線を奪われた。
「初雪だ！」
2人と浮竹は言い合いも忘れ、雪を見て子供のような笑顔を浮かべた。

十一番隊舎では、更木剣八が縁側に寝転がり、雪を見上げていた。
その隣では、はしゃぐやちるが縁側を走り回る。
「おい、あまり走るんじゃねえ。杯がひっくり返るだろ！」
言葉こそ乱暴だが、更木の声音は決して不機嫌ではない。
七番隊舎でも、京楽が執務室の窓辺に座り、雪見酒としゃれこんでいた。
背後では、七緒がふっと読書の手を止め、舞い踊る雪に表情を和らげた。

治安の悪い地域でも、争い殺しあうものたちが、ふと正気に戻り、空を見やった。
まずしい地域でも、豊かな地域でも、死人にも死神にも、ふわふわと雪が降り積もってゆく。
それは、一年の疲れや熱を、清く洗い流すようでもあり。
はしゃぐ子供たちの声を聞きながら、一護たちはしばらく黙ったままでいた。

「寒いか？」
冬獅郎が、梅を肩越しに振り返った。
そして、首に巻いていた、白哉の襟巻を手渡す。
それをまとった梅を見て、冬獅郎はかすかに苦しそうに眉間に皺を寄せた。
「ごめんな、ばあちゃん。いつも寒い思いをさせて」
「なにを言ってるんだね、この子は」
梅は頬に笑みを浮かべたまま、目を閉じた。
「ばあちゃんは、お前の力を冷たいなんて想ったことはいちどもないよ。
お前はいつもあったかい」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

振り返った日番谷くんの表情は、ほんとうに子供みたいだったっけ。
嬉しそうに、笑ってた。
あたしが日番谷くんを見下ろしたとき。ふと彼が表情をなくしているのに気づく。
頬を朱に染めながら、ほぅ、と白い息を吐いて上空を見上げてた。
風邪、ひどくなるから入りなよ。
そう声をかけるには、その表情はあまりにひたむきで。
喉元まで出た言葉は、あたしの中に押し戻された。
そしてこれが、流魂街で日番谷くんが雪を降らせた最後になった。

エピローグ．　warm，　warm　snow

あの日の雪を追いかけるように、あたしはずっと、目を閉じたままでいる。
あたしは一日の業務を流魂街で終えた。雲ひとつない、夕闇が迫る空を見上げる。

結界のほつれから現れたのは、破面ではなかったものの大虚が何体も。
三班・四班だけでは戦力不足で、あたしも仲間も、何人も傷を負った。
でも、ここでは、誰もあたしたちに手を貸そうとはしなかった。

流魂街の治安の悪い場所なんて、あたしは隊長になるまで、行ったことがなかったけれど。
ここでは、他人に手を貸したものは、一緒におぼれるか欺かれるか、そのどちらかだから。
あたしたちも、初めから助けの手を期待していたわけじゃない。

でも・・・
日番谷くん。
あなたの雪を一番待ち望んでいたのは、こういう人かもしれないね。

今日も去年と同じように、潤林安であのお祭りは開かれてるだろう。
そして子供たちは、小さな手のひらを夜空にかざして、雪が降るのを待ち望んでいる。
おばあちゃんはあの日、日番谷くんからもらった白い襟巻きを巻いて、きっと今のあたしと同じように、空を見上げている。
でも、そのささやかな望みは、かなうことはない。

「雛森隊長！」
あたしをよぶ部下の声に、あたしは我に返る。
「怪我が軽いものは重傷者を背負って！」
「雛森隊長こそ・・・」
あたしの死覇装の袖からは、まだ血が流れ出している。傷は決して浅くなかった。
その痛みは、感傷に流されそうになるあたしの心を現実へと引き戻した。
「大丈夫よ」
あたしは部下を安心させるように、微笑んでみせる。

強くならなきゃ。
日番谷くんがもし、この風景を目にしたら。
目にすることはないのにそう思うのは、今やあたしの癖。
雛森強くなったな、って。
安心してくれるように。

四番隊舎に重傷者たちを運び込み、一番長くても一ヶ月の入院で済む、と勇音（いさね）さんから聞かされて、あたしはほっと息をついた。

「雛森隊長」
隊舎に戻ろうと外へ出たあたしの背中に声をかけてきたのは、卯ノ花隊長だった。
「卯ノ花隊長・・・突然のことに迅速に対応していただいて、ありがとうございました」
あたしがぺこっと頭を下げると、卯ノ花隊長は笑って首を振る。
「いいのですよ。ただ、自分を労わるのも、忘れないようにしてく

ださいね」
闇の中で、黒い瞳が、やさしくあたしに微笑みかけているのを感じた。
「強がってばかりいると、日番谷隊長が、きっと心配しますよ」
「え？」
あたしは、一瞬ぽかん、としたのだろう。
「そんなことないですよ。大丈夫です」
とっさにそう言って笑顔でつくろった、その瞬間。

ふわり。

白いものが視界を掠めた。
無意識に上に向けた手のひらに、あくまで白いそれは音もなく落ち、ゆっくりと、溶けた。
あたしの顔から、表情が滑り落ちる。

「入院した隊員たちは、四番隊が責任を持ってお預かりします」
そんなあたしに、卯ノ花隊長は微笑んだ。
「だから、あなたの家に、お戻りなさいな」

そして背中を向けて隊舎に戻っていく背中に、あたしは深く、深く頭を下げた。
心のどこかで、家に帰るのが怖いと思っていた。
そこに日番谷くんがいない事実を、思い知らされるようで。
見上げたあたしの頬に、雪が落ち、涙と共にあたたかく滑り落ちていく。

――雛森。

あたしを見上げるあの蒼碧の双眸、低いけどどこか舌足らずな声音。

あたしがその隣にいられなくたっていい。もう二度と、呼んでもらえなくてもいい。
それが今どこかで健やかであるように、あたしは強く強く願った。
家路につくあたしの足取りを導くように、雪は舞い続けた。
祈るように、癒すように、赦すように、そっと。

bleach in white fin.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4340d/

BLEACH in WHITE　－死神たちのクリスマス－

2010年10月8日12時11分発行